



文=伊藤哲也
写真=亀卦川 英樹



浜中駅(無人駅)はシンプルだが、満洒な感じがする。

根^ね 室本線^{むろもとせん}花咲線^{はなざきせん}は太平洋に面した湿原^{はまな}の中をゆく。浜中^{はまなか}駅で列車を降り、改札の窓口で微笑^{はな}みかけてくれる峰不二子^{はなふじこ}(※1)に微笑^{はな}み返して、駅舎の外に出た。空が青い。カメラマン氏の車に乗り込んで、



◎第二五回

浜中駅



霧多布岬にはツリガネニンジンが群生していた。

霧多布岬^{きりたつぷ}に直行した。この岬、正式には湯沸岬^{とうわかし}というのだが、通称の霧多布岬の方が馴染み深い。厚岸霧多布昆布森国定公園の一部である。



(上)風雨で文字がかすれてしまった松浦武四郎の歌碑。
(右下)霧多布岬展望台から湯沸岬灯台方面を望む。水平線が美しかった。

(※1)浜中町は漫画『ルパン三世』の作者、モンキー・パンチの故郷である。町のそこそこに、作品の登場人物のイラストなどが現れる。(※2)松浦武四郎(1818~1888)は生涯に6回、蝦夷地の調査を行った。この歌は1858年(安政5)の調査時に、霧多布を訪れて詠んだ(「浜中町史」)。

海に落ち込んでいた。
道端には青紫のツリガネニンジンが咲き、ツバメやカモメが空を飛び交う。波間には、運よくラッコの姿も見られた。松浦武四郎はこの地を訪れ、次のような歌(※2)を詠んだ。
かねてより荒き汐路と
きいたふの 島根に高く
よする白浪
きいたふとは、霧多布のこと。「以前から波が荒いと聞いていた霧多布であるが、



実際に海岸に来てみると、やはり白波が高いことだ」というくらいの意味だろうか。

今

夜の宿は霧多布の市街地から少しはずれた「食の宿きりたっぷ里」。築三十九年、五室の小さな民宿で、部屋に鍵と冷蔵庫はないが、宿主の武士聡さん・法子さん夫妻が温かく迎えてくれる。宿の名物は夕食の新鮮な魚介類。

この日はハッカクの焼き魚と海鮮丼だった。海鮮丼のネタはサクラマス、北海シマエビ、イワシのなめろうなど、地元の魚介を中心に十一種類。どれも新鮮で、一切れが分厚く、食べ応えがある。ハッカクもまた脂ののった大物で、これら



「きりたっぷ里」の海鮮丼。とにかくボリュームがあった。ネタやメニューは季節によって変更がある。

をつまみにビールや日本酒を飲む。ちなみに夕食は武士さん夫妻と武士さんの母親の三人と一緒に食べるので、何やら親戚の家に来た感じである。

他の宿泊者は上越市からバイクツーリングにきた村山直人さん、帯広市の会社員の葛巻勇哉さんの二人。聡さん、村山さん、葛巻さんと話が弾み、楽しい食事会となった。村山さんは四回目、三十六年ぶり



聡さんと法子さん。「きりたっぷ里」の看板の前で。



カヌーは自然の中に溶け込んでいける。



左から葛巻さん、武士さん、村山さん。根室の地酒「北の勝」で乾杯した。

に来たという。「こんなこともよくあるよ」と聡さん。気さくな性格が人を呼ぶのだろう。

翌朝はツアーガイドのLand Edgeへ。畑正憲氏が創設した「ムッゴロウ動物王国」の跡地で馬を飼っており、ここ自体も素晴らしいロケーションである。若田政雄さん（愛称あしやん）と伊藤庸子さん（愛称サニ）とともに、冒険

カヌーツアーに出発した。
風連湖にそそぐ別当賀川の下流の岸辺から、上流へ向かって漕ぎ出した。ゆるやかな流れの川は蛇行し、川幅は広いところで四十メートルほどだろうか。左岸に森林、右岸には湿地帯が広がる。



(左)トドマツに垂れ下がったサルオガセ。樹木に寄生するのではなく、空気中の水分を直接吸収して、光合成を行っている。(右)さけ・ます採捕場跡。遡上の時期に川をふさぎ、右手のコンクリート構造物の間へサケ・マスを誘導して捕獲した。

しばらくすると、空も川も果てしなく続いていくような、広々とした光景に入り込んだ。わずかな水と風の音、そして野鳥の声のほかは、ほとんど無音の世界。日々の些事に右往左往している心身が、ゆるやかにほどけていく。この胸のすくような感覚は、人間の手に汚されていない世界でのみ可能なものなのだろう。

ギンヤンマが水面に遊び、川岸ではエビがぴちゃぴちゃと跳ねている。上空をオジロワシが飛んで行く。シギやチドリ、カモの姿もあった。「私が一番好きな場所です」と、あしやんが後ろから声をかける。川岸のトドマツの枝に、ふわりとした白いひげのような植物が垂れ下がっていた。「サルオガセという地衣類の仲間です」と、サニーが教えてくれた。別名霧藻と呼ばれる、冷涼・湿潤な環境にしか生えないらしい。雄大な景色に目を奪われがちだが、こうした自然の一点一画に目を凝らすことができるのも、カヌーの魅力である。

一時間ほどかけて、さけ・ます採捕場跡に着き、Uターン。下る



右があしやん、中央がサニー。いい笑顔。

途中、カエデの樹液で淹れたハーブティーと、スタッフの手作りクッキーでティータイムをとった。ほのかに甘い樹液のハーブティーはじんわりと体に沁みとおおり、疲れも吹き飛んだ。



一休みしてゆっくり帰る途中、川に倒れ込んだ木の枝に、カワセミが止まっていた。その直後、今度はオジロワシが樹上にじっとしていた。どうやら、この日の川に歓迎されたらしい。人にも自然にも歓迎された旅だった。



樹上で身じろぎもしないオジロワシ。上空をゆっくりと舞う姿も見かけた。



「水辺の宝石」と呼ばれる美しいカワセミ。シャッターチャンスはなかなか訪れない。